

Crossing

クロッシング・ポイント Point

松田 薫



河出書房新社

クロッシング・ポイント
Crossing-Point

松田薫

河出書房新社



クロッシング・ポイント

著者

まつだ かおる
松田 薫

一九九三年二月一六日 初版印刷
一九九三年二月二四日 初版発行

発行者 清水 勝

発行所 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二一三二一
TEL (三四〇四)二二〇一(営業)
(三四〇四)八六一一(編集)
振替(東京)〇一〇八〇二

印刷 東洋印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

装幀 秋山法子

落丁本・乱丁本はお取替えいたします
定価はカバー・帯に表示しております

©1993 Printed in Japan

ISBN4-309-00827-5

目次

I ピンキツシュ・フラワー

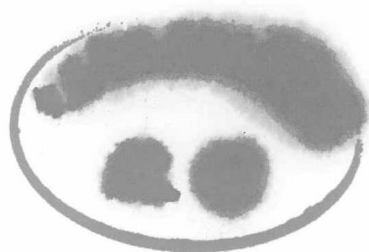
朱^{はねず}華

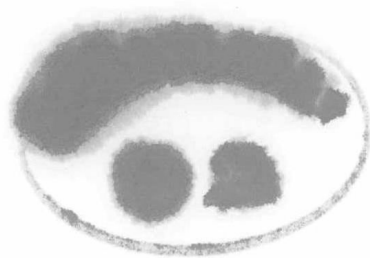
5

II ブライト・リップル

さざ波

105





クロツシング・ポイント

I

ピンキツシュ・フラワー

1

ゆったりとした緑のセーターの腕のふくらみがゆれ、さくら色のブラウスの胸のリボンがうごく。文書ファイルがならべられてある高いキャビネットのまえで峰山麻子はファイルをつぎつぎ手にしパラツとひらいてはとじて秘書課の資料をしらべている。キャビネットの上段に手をのばした峰山麻子の胸から腰が弓のようにはられ軀のラインがあらわれる。

机の左の新人社員表をとろうとした相沢祥介の眼が心が峰山麻子のからだをとらえる。

祥介の左ななめまえの松本香織が祥介をちらつとみて研修の案内文に目をもどす。

祥介の眼が心が峰山麻子のすつとのばされたゆびさきから、腕、胸、腰へと移ってゆく。……視線とおなじ方向に線香花火のようなちりちりとしたあまい刺激が胸から腰へながれ、どうじにこのあまさは軀の芯から芯にひろがつてゆく。

人事課とひとつブロックがちがう秘書課で新聞をスクラップしている沖田亮子がハサミの手をとめ祥介を見、その沖田亮子の視線をとなりの別府清栄が気づく。

峰山麻子が肩までの髪を耳もとから後ろへすく。すいたときにえりあしがあらわれ、背にやら

れたカールの髪が波うつ。

……光線のぐあいよろか、えりあしがぬれひかったように感じる。眼は心は峰山さんのどこにひきよせられて行くのやら……。ウェーブのある髪、うすいピンクのマニキュアのあるゆび、ゆるやかなドレープのあるセーター、黒の革のベルトでアクセントをつけたスカート。祥介の視線がおりてゆく。——黒のヒール、黒のメロン模様のストッキングにつつまれた脚。じぶんは服でさえアクセサリーでさえ峰山さんの心のあらわれとして、峰山さんの心のいちぶとしてみてる。いや、心といってもそれは軀といいかえることのできる心。……じぶんの眼が心がのぞいているのは……。

黄色のファイルを左手にした峰山麻子が右のひとさしゆびを口唇にちかづける。赤いルージュの口唇がすこしひらく。

祥介の視線が峰山麻子の口もとに。……じぶんの眼は心は峰山さんが軀のいちぶをみせてくれたように感じる。……眼は心はそんなところにとまっているのやらか、……。……、眼が心がのぞんでるのは、——、服をぬいで行くすがた、色も形もわからない下着、そして軀。眼は心は快感をともしなわせる表象をわがままに軀とみてる。峰山さんへの夢象の断片がじぶんの心と軀とをうごかして。ほとんどなにもしらへんのに自在にうごいて。いや、なにもしらへんから自在にうごいてるのかもしらへん。

黄色のファイルを手にした峰山麻子の重心が右脚から左脚に移り、腕がキャビネットの上段にのびたとき、

「きゃっ」つまさきだった軀のバランスがくずれ、左手がキャビネットの端をつかむ。

「だいじょうぶ」と高松容子が秘書課の席から声をかける。

峰山麻子が笑顔でこたえる。

きゃっ、という峰山麻子の叫びが、祥介の耳に心にのこる。——じぶんのからだに生々しくとおった峰山さんの声。声、……からだの内に閉じこめられたもの。

松本香織の左どなりの電話が鳴る。

「はい、人事です。尾関はただいま来客中で」と松本香織がこたえながら祥介をみる。

祥介と松本香織の目がぶつかり、

「——」祥介の峰山麻子へのところが、ぱつと拡散する。祥介は視線を作成中の研修スケジュール表に向けた。……松本さんの目はなんやろ、——知ってるわよ、見てたでしょう、という意味やろか。

峰山麻子が秘書課のじぶんの席にもどって行く。

「沢村も席をはずしております。——相沢はおりますが。相沢さん、松坂屋の中川さんからです。そっちに回しますね」と松本香織。

（……電話だったのか）祥介が目で、はいと返事する。

「もしもし相沢です」

「相沢さんですか、尾関課長、来客中だそうで」

「ええ、いま応接室に。お急ぎだと呼んできますが」

「いや……。じつは、おたくの森本澄美さんのことですけど……」中川泰夫の声がたどたどしくなる。

「はい、なにか」

「いえ……。午前中、客のあしらいもわるいし、暗くむつとした顔してるから、ちよつと注意したんですよ。——お客さんからもいわれたことが再三ありますし、……今村さんは明るくて、うちの店のイメージに合うんですけど」

「はい、すみません。森本とかわっていただけますか」

「いや……。それが昼食に行つてそのままどつてこないものですから……。もう四時すぎてますし」

「はい」

「そちらに連絡は」

「いえ、——わかりました。ありしだい連絡しますし、尾関とも相談しておきます」

秘書課の席で電話を受けていた高松容子が立ちあがり、祥介の右うしろに位置する総務部長のところへ行き、

「片岡部長、板倉常務さんとこのお通夜、七時からだそうです。メモここに置いときます」といったとき、紺のスーツの二十代の男と、トリプルストライプの四十代の男といっしょに第二応接室から出てきた尾関省吾が、ふたりに礼をしてから、

「高松くん、堀米さんたちを玄関まで送ってください」といって祥介の右どなりの席につく。

「相沢、立命館の中村謙二、研修メンバーに組み入れとって……」

「はあ」

「なんや相沢みたいなヤツやな、入社したいっていう気ぜんぜんみせへん。……そりや、一月にはいつて就職課のひとに連れられてくるヤツやから」

「ぼくそんな……」

「なんでえ、杉山さんが入社するかあつてたずねても、はあー、いうて、まともに返事せえへんかったいうやないか。——来年のこともあるからしかたないけど、どこに配属しよお」

「当人の希望は……」

「そこだけはしっかりしとんのや。ぼくは営業には向きませんから商品企画か宣伝がええつて、まあ、営業とかはでけへんヤツやな」と椅子に大きく背もたれていう。

「何部ですか」

「経済、いうとつたとおもうけど、法やつたかいな。——あつ、履歴書のファイル、応接室に置いてきたわ、東海林さん、ちよつと、とつてきて」と祥介の左の東海林景子にいいつけ、「タケダ化工さん自己管理が大切やいうて今年も宇治で座禅させるいうとつたけど、うちもびわ湖の研修センターつかうより、そのほうがええやろか、三、四日でもけつこうからだにしみつくいうてるけど、うちもせめて営業に配属させる連中だけでもなあ、——どうや相沢」

「尾関課長」と東海林景子がファイルを手わたす。

「三月のなかごろいうても板の間寒^{さむ}いでしよう」

「きまつとるやろ、——寒いからするんやない」

「尾関さん、するんやったら」

「わしかあ、年やもん、痔にひびくしな、沢村と相沢だけはさせたいなあ、性格改造」といつて前の空席をみて、「おい、沢村と高畑どこに行つとんのや」

「しりません」

「しらん……」尾関省吾の目が高畑茂の左どなりの松本香織に行く。

「四十一いうたら若いですよ」と祥介。

「あかん、もう」

「あ、いまさつき松坂屋の中川さんから電話あつて、森本さんが昼からいなくなつたつて……」

「また、脱走したんか、あの娘。大丸も阪急もあかんかつたし、……どうしよ。——中川さんも口うるさい人やから、髪かみの形から化粧まで……、なんやかやいうてくるけど、売れんものになあ、あそこは。高槻、人口四十万ほどあるのに……」

「そりや、やつぱり梅田や心斎橋で買ったほうがなんとなく都会の空気ついてくるいうか、——それにもう、いまのような形のデパートの時代でもないですし」

「そうや、えらい相沢は」尾関省吾が新入社員しんにゅうしやりんのファイルで祥介をさし、松本香織や曾根みはるたち女子社員をみる。

祥介の左どなりの東海林景子が、

「相沢さん……」と受話器をしめす。

「え……」と祥介が東海林景子をちらつとみて、はずかしそうにする。

「——だれでもわかっていることをそうやって自信もっていえるところがえらい」

「——」祥介がうつむく。

尾関省吾が顔をキョロキョロさせ、

「腹へったな、昼いそいでて、うどんだけやったから」

「相沢さん。神谷さんって方から」と東海林景子が祥介にもういちどいう。

「——カミヤ、……カミヤ」祥介の頭で無意味な記号のようにカミヤという音声が反復される。

「お待たせしました、相沢ですが」

「あつ、ぼんでつか、神谷でつけど」

「……なんや、神谷のおじさんか」

「きよう、どないだ、いつごろ終わりまんの。『加藤』はん、五時でつしやろ、それにいまごろ人事は暇でつしやろ、一段落ついて、研修には間があつて」

「はあ……」

「恒ちゃん、お父はんもな、——お父はんと六時に知恩院前のところで待ちあわせとんのや、ちょっと見てほしいもんあつて。——滝本はんとこで待ってますさかい、わかりまつしやろ滝本商店」

「えー、ぼくがですか」

「きてくれはつたらわかりまつさ。ここんとこぼんにも会^あうてないし、健ちゃんは正月に、あい

さつ、きてくれたけど……。恒ちゃんにも、ぼんの顔、ここんとこ見いひんな、さびしいいうて……。『ひぐらし』でも一杯やりまひよや、郁乃もいつとりましたでえ、ぼんの顔、結婚しはってから、いっぺんも見たことないって、真理子はんていう奥さんうるさいんやろかって」神谷雅国の声がはずみ笑う。

「そんな、——そんなことあらへんわ、健介があいさつゆうて、仕事やない」といって祥介が松本香織の目をみる。……会社やのに神谷のおじさんと話して、ふだんの言葉になつてしまつてる。「もおつ、こまかいことどうでもよろしいやありまへんか。とにかく六時ごろきてくれやつしや。総務、杉山さんやつたやろ、おっちゃんあんじょういうとくさかい、かわつてくれるか」

「はあ……」祥介のところが右うしろの片岡忠明に行つて、

「いいえ、二年まえから片岡さんで、杉山さん常務に」

尾関省吾が首をかしげて祥介をみる。

「あつ、そうやつたか、それやつたらあかな」

祥介が電話を置くと、尾関省吾が、

「だれやの」

「父のともだちの神谷さん」

「ああ、神谷建設の社長はんか」

「ええ」

「なんやの」と尾関省吾が横目でおとなしくたずねる。